

D. J. van de Kaa,

*Anchored Narratives: The Story and Findings of Half a Century of Research into the Determinants of Fertility,*

Population Studies, vol.50 No.3 (1996), 389-432

本論文が所収されている雑誌 *population studies* の創刊50周年記念号は、この50年間の人口研究における代表的主題（人口増加と開発・環境、出生力、方法論、死亡、歴史人口学など）の展開と成果について特集したものである。その中でこの論文は上記主題の中でも重要な位置を占める出生力研究について、「第2の人口転換」の提唱者として有名な Van de KAA 博士が担当したものである。

その内容は出生力研究のレビューにとどまらず、出生力研究が社会科学としていかに成立してきたか、といった科学的視点を取り入れることによって、多岐にわたる研究成果が手際よく整理され、出生力研究の今後の課題にとって示唆に富む議論がなされている。著者は優れた社会科学のストーリー（物語）を a) 存在を簡単に証明できる中心となる行動（現象）と b) その行動を簡単に説明できる設定（因果図式）、という2点から特徴づけ、その代表例として近代化に伴って多産多死から少産少死に移行するという「人口転換理論」を挙げている。そして50年間の出生力研究の多くは、この古典的人口転換理論や D.Kirk, K.Davis, F.Notestein, A.Coale らが提示した出生力低下に関する優れた物語を検証するための「下位物語」であったと述べる。この下位物語はアプローチによって以下のよう分類され紹介されている。(1)生物学的、技術的側面（死亡転換、自然出生力、近接要因の枠組み）、(2)経済学的行動からの説明（消費者選択理論の応用、子どもの質）、(3)社会的側面（家族の構造・機能、子どもの価値変化、富の世代間移転）、(4)イノベーションと拡散理論（文化、メディアの役割）、そして要因ではなくプロセスに着目した(5)制度による説明（出生力や家族形成を左右する行動規則群の経路依存性 path-dependency）。また、近年の出生研究の関心事としては、ヨーロッパにおける置き換え水準を下回る超低出生率、東アジアの急激な出生率低下が挙げられている。

さらに、これらの研究はしばしば①調査によるデータ提供、②分析手法の発展、③基金援助団体の意向、④政策的関心等によって方向付けがなされてきたとし、特にアメリカの役割を重視している。①として、L.Henry（フランス研究）、ケンブリッジ・グループ（イギリス研究）、プリンストン・グループ（ヨーロッパ出生プロジェクト）などによる大規模で広範な歴史的な人口データの収集と、1960年代の KAP 調査から1970年代の開発途上国を含めた世界出生力調査（WFS）に至る一連の一次資料の充実を挙げ、これらが研究の発展に果たした役割の大きさを指摘する。また女性の地位向上やリプロ・ヘルスが謳われたカイロ人口会議における④政策的関心の強さなども指摘している。

最終章で著者は50年間の出生力低下を説明する種々の下位物語の登場を、黒澤明の映画「羅生門」（断片的な証拠を残した1つの事件について、いくつもの「真実らしき」説明がなされるが、最終的に「真実」は分からない）になぞらえる。幸いこれまでの下位物語は、専門家集団に認知された人口転換理論などの強固な柱によって、科学的真実としての体裁を保ち、活発な議論が展開されてきた。それは社会科学にとって有意義なことであった。今後の研究が個別の事情に即した細分化に向かうのか、人口転換理論に相当するような統合理論に向かうのかは分からない。特に「人間の一般モデル」に対しては従来のような合意が得られにくい状況もあり、統合理論の必要性自体議論の余地があることが指摘されている。しかし実験不可能な歴史の中で過度の相対主義に陥らないためには、人間行動の普遍性を見落とさないよう努め、新たな統合化理論によって個別の議論をつなぐことが、個々の研究の活性化にとっても有効であることを著者の視点は示しているのである。（岩澤美帆）